

甌島における次世代への方言継承活動としてのカルタ作製 及び関連の言語調査

祖慶 壽子*

This article introduces a research project to study dialect which was conducted on Koshiki Island and employed Karuta cards as an inheritance activity. Among thousands of languages existing at the present time, half are in danger of disappearing. UNESCO reported that 6 languages of the Okinawan Islands are endangered. Koshiki Island located in the city of Satsumasendai in Kagoshima Prefecture faces similar problems. This article introduces not only the current language challenges faced by islanders but also suggests the idea of giving hope to elderly people by enlisting their help in teaching the local language to younger generations.

1. はじめに

論者が鹿児島国際大学地域総合研究所に設置された清水プロジェクトに参加したのは2019年であるが、コロナ感染症の流行によりその年の後半から方言保持者に対し直接会うことができず、本格的な調査が進められない状況となった。そこで、継承活動は調査後に予定していたのであるが、継承活動に関連した作業を先行して行うことにした。具体的には方言保持者が地元で良く使用している表現を読み札にしてカルタを作製し、子供達に方言を伝える活動を行い、調査は読み札の分析に変更するということにした。読み札は甌島側が、絵札は鹿児島国際大学の学生または卒業生が担当した。本稿は方言調査の意義、問題点、方言継承及びその具体的活動としてのカルタ作製とその理念とについて述べる。

2. 甌島の概要

甌島列島は、薩摩川内市に属する上甌島（かみこしきしま）・中甌島（なかこしきしま）・下甌島（しもこしきしま）の3島で構成されている¹。甌島の人口は上甌島が1,889人、中甌島が198人、下甌島が1,932人計4,019人と多くはない²。

キーワード：方言調査, 継承後, カルタ, 甌島

* 本学国際文化学部教授

1 鹿児島県のホームページ 甌島列島の概要（2021年8月16日引用）

http://www.pref.kagoshima.jp/ac07/pr/shima/gaiyo/koshiki/koshiki_top.html

2 薩摩川内市役所ホームページ統計データ | 薩摩川内市 (satsumasendai.lg.jp) (2021年8月16日引用 町別住民基本台帳2021年4月1日現在)

<https://www.city.satsumasendai.lg.jp/www/contents/1300087101977/html/common/other/61301efe031.pdf>

2.1 甑島の歴史

「上甑村郷土誌」³には次の記述がある。甑島には遺跡があることから縄文時代の古くから先住民族が住んでいたとみられている。当時より南九州，特に薩摩半島西海岸と関係が深く，同一文化圏に属しているとみられる。奈良時代になると，甑島は薩摩国13郡の一つの郡を成し，そのころから「薩摩隼人」ということばが表れてくる。また奈良平安時代に甑島上村に本地頭が置かれ島津庄を中心とした歴史もある一方，豪族の中には平家全盛の権力を籍って，平家の落人が勢力を張ったともされ，本村江石には源平の戦いに敗れた平氏の残党が土着したとの伝説や，平良にも平氏の落人が住み着いたとも伝えられている。鎌倉時代になると元軍襲来の際，沖の元軍の模様を鎌倉幕府に報告したと伝えられている。戦国時代になると島津氏が勢力を増した。この時代は大陸では明の時代で，倭寇の記録とともに甑島のことも書かれていて，明からも認識されていたことがわかる。地頭は寛永ごろからは鹿児島城下居住であったが，江戸現地に赴任するものもいて，それを移り地頭と呼んだ。唐船の領地寄港もあり，甑島地頭本田井親政に対して，甑島における唐船入港取り締まりの覚を発した。「上甑村郷土史」⁴によるとその後もポルトガル船に乗ってキリスト教を日本に伝えたザビエルの案内役であるアンジローが迫害され，転々とし，最終的には下甑村の長浜海岸にたどり着き，その地で布教を続けたと言われている。明治以降地頭がなくなり薩摩藩ではなく，日本国鹿児島県の一部となった。

2.2 交通状況

上記に見られるように，遠方との交流が盛んであった甑島ではあるが，交通の発達した現在においても陸路より海路が発達していて串木野港からはフェリーが川内港からは高速船が就航している。甑島の3島間の交通は最近まで海路のみであったが，1993年（平成5年）の上甑島と中甑島の間に甑大明神橋と鹿の子大橋が架けられ，2020年2年8月29日に中甑島と下甑島との間に甑大橋が開通することにより3島がつながったことで，陸路の利用が大きく増えることが見込まれる。



図1 甑島の地図と交通網（鹿児島県ホームページより）⁵

3 上甑村郷土誌編集委員会（1980）による編纂で，章ごとの文責は明示されていない。また謝辞によってもこの部分の執筆者が特定できないため，本文に名前を記載していない。

4 奥付には発行年月日，（昭和35年〔1960年〕）と上甑村長が明記され，発行者が上村良平，発行所が上甑村役場となっている。

5 鹿児島県のホームページ 甑島列島の概要（2021年8月16日引用）

http://www.pref.kagoshima.jp/ac07/pr/shima/gaiyo/koshiki/koshiki_top.html

3. 本研究の目的

論文の冒頭で述べたように、最初に予定していた調査がコロナ禍で本格的に進められなくなったことにより、調査後に予定していた継承活動関連の作業を先にしたことから、ここで両方の目的を合わせて述べることにする。

3.1 甌島における言語調査の目的

昨年度「言語危機を抱える甌島における言語状況への考察」(2020)で方言調査の目的を述べ、今回もその調査と同一のプロジェクトであるため、目的はその部分を引用する。調査方法は変更になったが、最終的な目的は同じである。

世界には何千という言語が存在しているが、その数は年々減少し今世紀末には半減するとも言われている。ユネスコは絶滅が危惧されている言語を公表していて、世界では2500の言語、日本では沖縄県の6方言と小笠原方言とアイヌ語がリストに掲載されている。(ただし、ユネスコでは方言と言語とを区別していないため、8言語となっている。)しかしながら、そのリストに掲載されていない甌島の言語状況がそれら8言語にも劣らず危機的であるとの報告があることと、今年度の清水プロジェクトは甌島に焦点を当てていることから、甌島での言語状況を調査することにした。

上記の危機的な状況は今後も悪化することが予想されているが、言語の記録を可能な限り残すため、多くの研究者が調査を行っている。本研究の目的も甌島の言語の記録と保全である。上述の祖慶(2020)もその目的で始めたものの、1度予備調査を行った後コロナ禍下の状況で方言母語話者との直接接触ができなくなったため、間接的な情報しか得ることができなかった。その調査のことは後述する。

3.2 甌島における継承活動の目的

前項で甌島方言が消滅の危機にあることを述べたが、継承活動は方言を少しでも消滅の危機から救うため、次世代へ方言継承をすることである。調査及び継承活動の具体的な方法を述べる前に、方言調査・方言継承活動自体の意義・理念と問題点について以下の項目で触れる。

4. 方言調査・方言継承活動の意義と問題点

方言調査と方言継承に関しては通常、研究の目的はもちろん言及されるのであるが、意義に関してはすでに定まったことのように捉えられていることが多い。本稿では調査の当初の方法や内容を変更したことから、今回その変更に際して調査・継承活動自体に関して根本から問いかける必要があったため、以下にそれらの意義及び問題点について詳しく述べる。

4.1 方言調査の意義

一般的に以下のことが方言調査の意義として挙げられる。

- ① 複数地域の言語を調査し、その形態を比較することによりその地域を含む言語の歴史的变化や伝播を知る、または推測することができる。
- ② 当該言語の変化を知ることにより、その地域の人々の言語外の歴史も推測する可能性が生まれる。
- ③ 当該地域で使用されている語彙により、その地域の文化を知ることができる。

上記③の例として、祭りに関する語彙があり、その地域の住民がそれらを使用していることにより、その地域でその祭りが存在するか、あるいは過去に存在した等がわかる。このことにより、当該地域の住民にとってその祭りは生活の一部で、精神的支えである可能性があることがわかる。このように、言語（方言）調査はその地域の住民が大切に思っていることを示している。

4.2 方言調査の意義と問題点に関する先行研究

小林隆（2007）の「ガイドブック方言調査」は方言調査について次の様に述べている。「この『おまえ』は限『御前』という語源通り敬意を含んでいる。ところが、谷を下るにつれその敬意は薄れ、海岸の地域では「おまえ」は共通語と同じ、対等以下に対して使うことばになっていた。『おまえ』の意味の歴史的变化が、一本の谷に沿って地理的に展開していたのである。[改行] このときの発見の感激は今も忘れられない。」このように調査者からみた調査の意義が述べられているが、論者もこの点には同意するが、これから述べる内容とは直接関係がないので、ここでは触れない。同書では「社会的側面」として情報提供者（インフォーマント、前述の方言保持者、方言母語話者にも重なる場合が多い）についての項目が設けられているので、以下に紹介する。

調査においては、インフォーマントに教えを乞うという姿勢が大切である。これは当たり前のことだが、ともすると相手の協力が当然であるかのような錯覚に陥ることがある。そうしたことを避けるためには、少なくとも次の2点を守るようにしたい。[改行箇条書き] ①インフォーマントや協力期間の立場に立って計画する。②調査者の意図を十分理解してもらう。[改行] 調査はインフォーマントや協力機関にとってたいへんな負担となるものである。したがって、協力する側に立場にたって計画することで、少しでも軽く引き受けてもらうことが大切である。

以上が小林の方言調査における意義と問題点に関する記述である。小林は問題点よりも、それを回避するための方法を特に述べていて、インフォーマントの選び方やインフォーマントや仲介者との協力関係構築、例えば①インフォーマントや協力機関の立場に立って計画する。②調査者の意図を十分に理解してもらう、との調査の際に参考になる記載がある。また、「調査者の社会的貢献」の項目では「地元の人々の中には面倒な調査に付き合わされ、知識や情報を搾取されたという被害者意識を抱くケースもある」と書かれている。このように、調査には様々なインフォーマントや仲介者に対して考慮が必要である。

次にトッピング・マシュウ・W（2021）の論文を紹介する。マシュウは危機言語である沖縄県の石垣市（八重山地域）において参加型アクション・リサーチ（PAR）の方法論実践研究者で、現地で継承活動として「マスター・アプレンティス語学学習」という危機言語再活性化の手法を応用している。この学習法についてマシュウは、「カリフォルニア州の先住民居住地域において若者（20代～30代）とその地域のヘリテージランゲージ（継承言語）に堪能な長老にペアを組んでもらい、若者の言語習得を促進するための活動である」と述べ、この方法を取った理由に関連して次の様に語っている。

琉球諸島で行われてきた記述研究の少し厄介な傾向に気がついた。[略] 研究参加者が研究者に言語知識を提供した後、研究者は自分の機関に戻ってからは参加者に全く連絡しない場合がある。研究者の貴重で慎重に計画され実行されたフィールドワークの成果は学会誌に掲載され、やがて書物に綴られ、大学の図書館に保管される研究記事、本、報告書、マイクロフィルム、またはその他のメディアになる。このような記述言語学または方言学の成果は、学術的文脈の中で教材の開発に役立つことを意図していることもある。また、フィールドワークが行われた地域社会に直接還元される応用言語学資料という形になること

もある。[略]対象者側に「研究疲労」をもたらすことがあり、非常に望ましくない結末を招くことがある。八重山地方には、このような経験をしてしまった地域社会が実際にあると考えられる書物に綴られ、大学の図書館に保管される。研究記事、本、報告書、マイクロフィルム、またはその他のメディアになる。

上記2例にあるように、言語調査は最終的にはその地域に益をもたらすものではあるが、直接調査に関わった人々に必ずしも良い結果をもたらすものではない。論者は未だ大規模調査は行っていないが、情報提供者に還元できる方法はないかと常々思案していたところである。今回のコロナ禍において方言話者に直接面会することができず間接的な方法を取らざるを得なくなったことから、逆に積極的にこの問題に向き合う良い契機となった。

4.3 方言調査の問題点

前項に取り上げた調査の方法に関する内容に加え、標準語ではなく方言であることから生じる問題もまとめて方言調査の問題点を下にあげる。

- ① 集中的な調査により協力者が疲弊することがある。
- ② 言語調査で必要な語を採取するには膨大な時間と工夫も必要になるため、容易にこの目的では実行できず、一部の形態のみの採取となる。例えば、日常語に対し敬語等、また類似の表現等の全てを採取することは困難である。
- ③ 調査者と協力者が調査後にコミュニケーションをする機会が少なく、協力者への還元が十分でない場合が起こる。
- ④ 方言は変化するのが常であり、同一の個人であっても場面により異なる言い方をすることがある。
- ⑤ 方言に限らず言語というものは完全に複製することは困難であるため、異なりが生まれる。
- ⑥ 社会は変化するため、新しい事物を表現するためには新しい言葉を導入する必要がある。従って、世代によって、または個人によっても新しく取り入れる言葉が存在する。それゆえ、当該地域においても調査時に発話されたのが唯一の表現であるとは限らない。
- ⑦ 個人も移動することがあるため、ある地域にいる特定の年代の者であっても他地域からの影響を受けている可能性がある。特に島においてはその傾向がある。例えば、方言話者であっても近隣の地域から移動してきた人である可能性がある。
- ⑧ 現代は特に外界からの言葉の流入が多く、若い世代ほど多くマスメディアまたはSNSの影響を受け易い。

以上、このような問題点が存在するものの、通常はこれらの問題を避けるため、他の地域に住んだことが無い人をインフォーマント（情報提供者）として依頼するのである。しかしながら、そのような人は非常に少なく、これからはますます探すのが困難になっていくと思われる。上記⑦の問題点としては、現代では方言を話す人でも母語としての方言話者ではないことも考えられる。論者が面会した調査地に生まれ育ち、その地域の方言を話す人でも、確認のためその地域の方言辞書を参照すると答えた人がいた。その場合、どのように考えたら良いのか、という問題が生じる。その問題点とは次のようなことである。

- ① 書籍等から得た語彙など、自然に獲得した言語でないため、適切に使用できていない可能性がある。
- ② ①の場合、発音も実際の音と異なる可能性がある。
- ③ 個人の選択により、より広い地域の方言共通語を獲得した場合、出身地域とは異なる方言を話すことになる場合や、当該地域を記述したものがないため、より広い地域共通語を結果として選択使用している場合がある。例えば、鹿児島市郊外地域に住んでいる人の場合、方言として鹿児島市の方言の書物から方言を獲得した等である。

このように方言の特徴にも関連して、調査には多くの問題があるが、方言の継承に関しても問題がある。事項にてその継承の意義と問題点を述べる。

4.4 方言継承の意義

このように方言とは現在または過去の住民の言語活動の表れである。それに対し継承の意義として以下のことがあげられる。

- ① 現時点、または過去における当該地域の環境に適した言語体系を次世代に継承する。
- ② 現時点で価値のあると認められたものを次世代に継承する。
- ③ 当該地域の先人の意識を次世代に継承する。
- ④ 言語的類似性のある地域との連帯を次世代に継承する。

4.5 方言継承の問題点

- ① 標準語との差が大きい方言が使用されている地域においては、方言と標準語の両方を流暢に話すことはかなりの努力を必要とする場合が多い。従って、完全に継承しようと考えると困難である。
- ② 社会の変化に従って方言から得られる情報より標準語の方が大きいことが多い場合が多いことから、方言継承と人々の生活が相いれないことがある。
- ④ 方言を受け継ぐ側が学業や仕事に忙しく、方言使用世代との交流が減少している。
- ⑤ 方言に対立する言語は標準語のみならず外国語（主に英語）も考慮する必要が出てきた。換言すると、将来の生活を考えた時、方言を学習するより英語等の外国語に力を入れる方が良いと考える人がいる。
- ⑥ 方言以外の言語が有利であると個人が判断し、選択する場合が出てくる。
- ⑦ 歴史的に方言使用が禁止、または標準語が励行された影響により、方言使用者が次世代に方言を継承できていない。そのことにより、家庭内での方言継承が行われる機会がかなり以前から減少し、継承が円滑に進まない状況が発生している。
- ⑧ 方言は人によって異なることもあり、標準語と違い、どの形態の方言を継承すべきか特定するのが障害となって、継承が順調に行えない場合がある。
- ⑨ 方言は元来変化するものであるため、現在の形を強制的に変化させないようにするのは困難である。方言は現在においても当該地域の人々の選択の結果であるため、今後もその選択が行われるのは自然のことである。したがって、一旦継承したとしてもその形がそのまま続くということにはならないし、現に他地域でも新しい形が出現している。

上記のことは前回の調査結果、祖慶（2020）の考察にも重なるところがある。前回の調査はコロナ禍で、方言母語話者への調査よりもその次の世代からの情報入手の意味合いが大きくなったが、その調査の中で上の⑤の意見があった。実際の言葉としては、「英語が必修となれば、そちらを優先してほしいから」とあり、「学校での方言教育は必要だと思うか。その理由は何か。」とのアンケートへの回答であった。このような回答は住んでいる地域の方言が標準語と大きく異なる場合、当然予想できることである。

4.6 次世代の方言に対する意識

本稿にも関連があるので前回の祖慶（2020）の調査結果を紹介する。前回の調査ではアンケートの集計をまとめたものであるが、その一部は記述式の回答を加え、その内容も方言継承に関連することであった。回答者は本来の調査対象者であった方言母語話者に直接接して生活の支援を担当する社会福祉協議会の職員の方である。20人から回答が得られた。記述式の質問だけを順番に述べる。①（方言を知らないことで

困ったことがあるか、ある場合はどんなときか ②方言が理解できたことで良かったことがあるか・あった場合、どのようなことか ③学校での方言教育は必要だと思うか、その理由は ④次の世代にも方言を伝えたいと思うか、その理由は何か ⑤方言はどのように使用されるべきか ⑥方言に関することを何でも書いて欲しい、の以上である。類似の質問も入れてあるが、他の選択肢の質問に関連して尋ねたものがあるため、意味合いの多少異なる質問をすることにより回答者の本当の意図が理解できる可能性があるのではないかと思い、それも合わせて載せることにする。全体を次の3つに分けて紹介する。従って上記の番号とは一致しない。上記①②を新規の①、③④を②、⑤を③に、⑥は①から③の中の最も近い内容のところに入れた。

<p>①方言の良い点、または知らなかったことで困った点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・面接や電話対応の際、意味が分からなかった。 ・話が理解できなかった。(4) ・相手の気持ちが理解でき、伝え、スムーズに共有できる。(5) ・コミュニケーションがとれる、機会が増えた。(4) ・親しみが持てる。 ・理解できたことを喜んでもらった。 ・わからないときに聞き返すことによってより良いコミュニケーションをとることができると思う。 ・その地域の人にとって方言は何よりも意思を伝えやすい大切な手段だと思う。 ・方言で地元を思い出す。落ち着く。 ・独特の地域の方言は宝だと思う。
<p>②方言の継承に関して(否定的な意見は下にまとめてある)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の文化として残しておいてほしいため。 ・地域の人のコミュニケーションがうまくいく。方言特有の微妙な気持ちを言い表せることができる。(2) ・方言がなくなってしまうから。(2) ・子供たちが方言を通して地域に興味を持つようになったから。 ・簡単な方言くらいは知っていてほしいから。 ・地域性を大切にしていきたい。 ・地域の文化や伝統を残してほしいため。(2) ・温かみのある言葉を残していきたい。 ・子供たちにもっと方言の良さなどを知っていてほしい。 ・なくなるのはさみしいから。 ・言葉で出身地がわかるため。(2) ・自然に伝われば良いと思う。 ・方言はなくしてはいけないから。もったいないから。(2) ・わざわざ教育しなくても自然に残っていくと思うから。 ・方言を楽しく理解できる高齢者の減少。 ・英語が必修となれば、そちらを優先してほしいから。
<p>③方言使用のあるべき姿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常の中で自然な形で使われてほしい(2)。 ・使えなくても何を言っているかわかることができたらいいと思う。 ・様々な年代の人とのコミュニケーションの1つとして(2) ・簡単に使用できる方言の教室があればいいと思う。 ・廃れないように残していく。 ・無形文化として使用される。 ・方言を話せることによって、詐欺の被害が減るのではないか。 ・今の方言話者を尊重していくこと、理解していくことなど自分たちにもできることをしていくべきだと思う。 ・地域の中だけで使用されるべきだと思う。
<p>④その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・方言を利用する年代について具体的に知るべきだと思う。 ・昔ほど方言が使われなくなっている。 ・同地域内でも方言の差によってより細かく分類できると思う。 ・方言の内容を全く理解できないことはないと思う。

上記の結果により、方言使用者の次世代の多くは継承が必要であると考えていることがわかる。ただし、その継承の程度等に関しては実生活との兼ね合いで温度差があることが分かる。また、前回の調査時(祖

慶2020)にも、「『年配者が方言のことについて質問され、それに対して答えることができることを喜びに感じ、それが生きがいにも繋がっている』とのことが福祉課の職員からあった」ことや「住民本人たちからも同様の意見があり、今後もこのようなことをして欲しいとの要望があった」ことを掲載した。

この結果を受け、当該調査地における継承活動の方法を選定した。その理由は、現地の生活に即した継承活動があるべき姿であると考えたからである。

5. 継承活動としてのカルタ作製（カルタの読み札作製による方言採取方法）

5.1 カルタ作製を決定した理由

以上のことを考慮し現時点で実行可能な範囲内での情報提供者（方言母語話者）、調査協力者が共に有益な活動はないかと考えた結果、調査と継承が両立できる方法としてカルタ作製に取り組むこととした。カルタ作製を選んだ理由は以下のことである。

- ① 製品として残すと後に調査地の皆が利用できる。
- ② 情報提供者側（協力者も）にとっても今後の励みになると思われる。
- ③ 方言話者ではない協力者も方言に関心を持つ契機になる。
- ④ 将来を担う子供たちが方言に接する機会を与えることができる。
- ⑤ カルタを媒介にして世代間のコミュニケーションを促進することができる。
- ⑥ カルタ製作は論者が前年度にも手掛けたばかりであるので、すぐにも今回の作製にも着手できる環境にあった。

5.2 「甌島方言カルタ（仮称）」の特徴

上記の経緯でカルタを作製することになったが、他のカルタと異なるところは、目的が子供達への方言継承に限らず、その中間世代、何よりも今回は情報提供者が快く継承活動に参加してもらえることを目指した。今回の試みにより、今後の情報提供にも積極的になってもらえることを期待して作製した。内容的には、言語調査の意味合いも兼ね、地域の文化の紹介よりも発音上の違いをできるだけ盛り込むことに主眼を置いた。その点では使用法が今までのカルタとは多少異なることも考えられる。このことに関しては作製完了後に製作側と考えて行くつもりであるが、標準語の語彙がどのように方言とは異なるか、また、上甌島の地域による違いが多少でも知ることができるようになればとの思いで企画した。実際の読み句作製はいつも日常的に支援を担当されている社会福祉協議会上甌支所の職員の方が、句の作製の取りまとめをしてくださった。上記のことを含めこのカルタの目指していることは以下になる。

5.3 「甌島方言カルタ（仮称）」の作製の目指すところ

- ① 子供達や中間世代だけでなく特に情報提供者（母語話者）が快く継承活動に参加できること
- ② 次の（形を変えた）継承活動にもこのカルタ作製を契機に関心を持ってもらえることを期待
- ③ 地域における発音の違いや標準語との違いに注目
- ④ カルタ作製やカルタ大会（今後の予定）を契機に継承活動を日常生活の中に取り入れる
- ⑤ 継承活動を楽しむことができるようになる
- ⑥ 継承活動を外の世界とつながるきっかけにする（今後の予定）

5.4 カルタ作製の方法

カルタ作製は以上の工程で進められた。

- ① 仲介者（社会福祉協議会の職員）に、インフォーマントの選択を依頼
- ② 時間の余裕のある時にインフォーマントには娯楽に近い形で読み句の作製に取り掛かってもらうよう、仲介者に依頼
- ③ 地域及び読み札の調整
- ④ 絵札原案作製（甌島での作製及び祖慶ゼミ生の協力）
- ⑤ 絵札作製（祖慶ゼミ卒業生及び現役生）

以上の工程によりカルタ作製が進み、現在ほぼ作製が完了した。今後は多少の調整のみになったが、この工程の途中では紆余曲折もあった。それは、当初、地域の特徴を生かし6地区の異なるカルタを作製する計画を立てたのであるが、作製に取り掛かってみると、困難な点があったため、今回のカルタに集約することになった。また、絵札作製も当初は地元の小学生に依頼したいとの甌島側の希望があったため、甌島側が担当する予定であったのが、コロナ禍もあって依頼することができなかつたため、祖慶ゼミでの作製となった。祖慶ゼミでは鹿児島方言のカルタが完成した直後であったため、作製には問題なく取り組むことができた。カルタは2018年から作製を始め2020年3月に完成、2021年3月から発売を始めた。作製に関しては祖慶（2021）「カルタ作製により触発される方言継承意識—ゼミ活動としてのカルタ作製例—」に掲載されている。

5.5 読み札と取り札の紹介

読み句と読み札の一部を次ページより紹介する。表1が読み句45句中10句、図2が読み札、図3が絵札（取り札）である。読み句は方言の句で、その下にそれに対応する標準語があり、その解説が付けられている。表1は方言表記に関しては決められたものが無いので、作成者の原稿をできるだけ生かしてある。それをカルタにしたのが表1と図2である。図2に関しては漢字表記に振り仮名を振る形の句が多くなった。その理由として、一見して意味が理解できた方が実際に使用するとき便利だと考えたからだ。読み札にもどの地域の方言であるかわかるようにしてある。後に方言に興味を持ったとき、どこの地域の方言なのかわかるようにするためである。表2は読み句の言葉を抜き出したもので、方言と標準語の対応となっている。それにも地区がわかるようにしてあるが、スペースの関係で地区名は略語にした。「中」が「中甌地区」、「野」が中野地区、「江」が「江石」、「瀬」が「瀬上」、「平」が「平良」、「里」が里、「小」が「小島」である。「桑」が「桑之浦」となっていたはずであるが、桑之浦の方言は今回、発音の特徴としてリストに取り上げられたものにはなかった。

以上、カルタの説明をしたが8地域全地域から作成のために参加してくださった。コロナ禍なので、普段の活動の一環として仲介者の下、作成が進んだ。

6. 甌島方言の特徴

6.1 調査地

甌島の行政区分の名称は複雑で、上甌島に里町と上甌町が、下甌島には鹿島町と下甌町があるが、中甌地区は中甌島にあるのではなく上甌町にある。このように島名と町名が一致していないところがある。上甌町には中甌地区の他に、江石地区、中野地区、小島地区、瀬上地区、桑之浦地区があり、また、平良地区は中甌島にあるが、行政的には上甌島の他地区と共に行われているようである。尚、現在甌島は薩摩川内市の一部である。調査地点は以下の地点である。（図2）



図2 調査地

6.2 里・上甌方言カルタ (仮称) にみる甌島の方言音

里・上甌方言カルタ (仮称) の読み句 (表1), 読み札 (図3), 取り札 (図4), 読み句中の方言 (表2-1, 2-2) を以下に掲載する。

表1 里・上甌方言カルタ (仮称) 読み句 (薩摩川内市社会福祉協議会上甌支所作製)

あ	朝が来たどおー おんどんもーちで よろこぶ ころぼうども 朝が来たよ おんどんもーちで よろこぶ 子供達	か	かんかけどおーの たけたどう いえーの奥から 母ちゃんの声 とおもろこしが 炊けたよ 家の奥から 母の声
	中甌 1月7日の鬼火焚きを行った翌日、行われるのが「おんどんもーち」夜明け前に親が餅を撒いておき、集まった子供たちが喜んで餅を拾っていた。		江石 かんかけどおー (ともろこし)
い	イッタタンゴジョー みじであすべば うーかぜなこんろー イッタタンゴジョーが水で遊べば うーかぜ (台風) は来ない	き	・きゅう きゃーば くうきゃー けー (里) ・きゅう けー くうけー けー (瀬上) ・きゅうなー かーば くうかー けー (小島)
	小島 イッタタンゴジョー (キセキレイ) が川遊びをしていたら、その年は台風が来ないという言い伝え		ー 今日 貝を 食べに おいで
う	うんべたーあ なかごいなたどー 江石の浜あ 昔あ なまなきれいか 浜あつたてー 埋め立てにより、波打ち際は無くなったよ。江石の浜は、昔はともきれいな砂浜だったんだよ	く	くーあ かーばりいえあつてえ はらいっぺー はっちりこーば くうど 今日は、かわばり祝いだから、お腹一杯、白ご飯を食べよう
	江石 江石地区の砂浜は、ウミガメが産卵上がるなど長くきれいだっただ。		江石 かーばりいえ (大敷き網の準備後の祝いの席) はっちりこー (白ご飯)
え	えいしにーろー さとぼーちゃー なんごしきゃーもに た いらにゃー おしまそ せがみあじえー かななあっぱー	け	けーまいば すーごとあいばつて ごーごもかなわんなー けまりをしようと思うけれど 体がゆうことをきかないなー
	ー 島の各地区の方言を遊び歌のようにいったもの		里 けーまい (けまり)、ごーご (体、動き)
お	おめつきやいもーさん おきやいもいたな あはようございます 起きられましたか	こ	このやとい むかしは どっさい おったばつて なまこ獲り 昔は たくさん いたのになあ
	里 あいさつ		瀬上 ナマコ池のナマコは、昔はたくさん獲れていた



図3 里・上甌方言カルタ (仮称) 読み札



図4 里・上甌方言カルタ (仮称) 取り札

表2-1 里・上甌における方言カルタ中の方言リスト

	甌島方言	標準語	地区		甌島方言	標準語	地区
1	どおー	よ	中	51	踊い	踊り	里
2	もーち	もち	中	52	やいどー	なんですよ	里
3	こぼう	こども	中	53	しゃさんによ	白鷺よ	瀬
4	ども	たち	中	54	しあさんによ	白鷺よ	瀬
5	みじ	みず	小	55	くーびー	首	瀬
6	あすべ	あそべ	小	56	さーんとなって	ちゃんと	瀬
7	うーかぜ	台風	小	57	オーローバイ	きれいなことよ	瀬
8	な	は	小	58	すごかったろ	すごかったんだよ	瀬
9	こんろー	来ない	小	59	せまんか	せまい	瀬
10	うんべたーあ	うめたてにより	江	60	みーじ	道	瀬
11	なかごい	波打ち際	江	61	山超いれ	やまを超えて	瀬
12	なったどー	なくなった	江	62	だいてに	みんなで	瀬
13	(はま) あー	(はま) は	江	63	かよーら	通った	瀬
14	(昔) あ	(昔) は	江	64	はよいたて	早く行って	江
15	なまな	とても	江	65	かずらば	やまかずらを	江
16	きれいか	きれいな	江	66	ふっばってけー	取って来なさい	江
17	あったてー	だったんだよ	江	67	だーせ	だせ	里
18	おめっかやいもーさん	おはようございます	里	68	よめじょーだっしゃれ	嫁を出しなさい	里
19	おきゃいもたな	起きられましたか	里	69	ださんちゅーと	出さないと	里
20	かんかけどおーの	とうもろこしが	江	70	かーさ	傘	里
21	どう	よ	江	71	残らんどおー	残らないよー	里
22	いえー	いえ	江	72	ちびんか	小さい	小
23	きゅう	今日	里	73	マンジョー	マンジョーという巫女	小
24	きゃーば	貝を	里	74	みじよか	かわいい	小
25	くうきゃー	食べるに	里	75	月のいで	満月に	小
26	けー	おいで	里	76	とにいら	届いていた	瀬
27	きゅう	今日	瀬	77	ばらげ	ばたけ	瀬
28	けー	貝を	瀬	78	今ねえ	今では	瀬
29	くうけー	食べるに	瀬	79	どんこうのん	蛙さん	瀬
30	けー	おいで	瀬	80	なーんかもんが	蛇が	瀬
31	きゅーなー	今日	小	81	ん	の	小
32	かーば	貝を	小	82	なーやいつろー	なまえだそうですよ	小
33	くうかー	食べるに	小	83	にーしん	西の	小
34	けー	おいで	小	84	しおんひれば	大潮になると	里
35	くーあ	今日は	江	85	とうじん	マテ貝	里
36	かーばり祝 (い) え	かわばり祝い	江	86	とるいどお	捕れるよ	里
37	あっでえ	だから	江	87	ぬっかひん	暑い日の	中
38	いっぺー	いっばい	江	88	畑しごたあー	畑仕事は	中
39	はっちりこーば	白ご飯を	江	89	しんどかねー	たいへんだな	中
40	くうど	たべよう	江	90	ねっからで	みんなで	平
41	けーまいば	蹴鞠を	江	91	あかねかぶった	たくさん捕れて	平
42	すーごと	しようと	里	92	よかったにゃー	よかったなー	平
43	あいばって	思うけれど	里	93	のったりおいたい	乗ったり降りたり	瀬
44	ごーごー	体, 動き	里	94	ふとか	大きな	瀬
45	かなわんなー	きかないなー	里	95	一日ごーし	一日おきに	小
46	このやとい	なまこ捕り	瀬	96	ぬくー	暑く	小
47	どっさい	たくさん	瀬	97	ないとなー	なってますね	小
48	おった	いた	瀬	98	さばーかやった	にぎわった	里
49	ばって	のになあ	瀬	99	かずらたて	十五夜行事	里
50	サッコラ	サッコラ踊り	里	100	へばふった	おならをしたよ	平

表2-2 里・上甌における方言カルタ中の方言リスト

	甌島方言	標準語	地区		甌島方言	標準語	地区
101	ほ(一)んぼ	とんぼ	瀬	111	あつとなあ	あるなあ	瀬
102	開ければ	あくれば	野	112	そーがあつ二日の	正月二日の	瀬
103	なんごし	中甌地区	平	113	かまた一ぎ	釜炊き	瀬
104	ねっから	皆が	平	114	ちゃっぼうのうが	小学校3年生男子達が	平
105	めんろか	面倒な	小	115	みにようがころ	かわいことよ	平
106	ことれも	ことでも	小	116	なまん		平
107	きばんば	頑張れば	小	117	じえんばたらき		平
108	よかことの	良いことが	小	118	あかねかぶった	たくさん採れた	平
109	あいたいが一	ありますよ	小	119	ゆいねほい	百合の根掘り	平
110	してみようごろ	してみたいこと	瀬				

6.3 甌島方言に関する先行研究の概略

前回の報告書にも載せたが地域により方言の異なる甌島の発音に関してはまだまだ調査の余地が残されている。現在発音に関して詳細が記されているのは前回先行研究で引用した窪蘭晴夫他(2015)の「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」と木部(2011)の「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書」である。前者は里地区に関する記述が主で後者では瀬上地区の発音について述べられている。

窪蘭他(2019)の「鹿児島県甌島方言からみる文法の諸相」は最近出版されたもので、発音についても記述されていて、里に関しては音韻体系も掲載され、しかも詳細な記述であるが、文法が中心の本であることもあり、他の地域の発音に関しては殆ど触れられていない。上村孝二(1980)⁶の研究は地域による比較している記述があるので参考にする。

以下、今後参考となると思われる木部(前回も引用したが)と、上村の例を引用する。

6.3.1 甌島方言の発音に関して

先行研究で紹介された甌島の発音について簡単に紹介する。論者の前回の論文にも紹介したが、木部の瀬上地域発音と上村の上甌全般の発音に関する表記と表2-1、2-2の分析を以下に述べる。窪蘭の記述は分析の形態が異なるため他資料との比較が困難であるため、今回は引用しない。

6.3.1.1 木部暢子の先行研究より

瀬上の音声、音韻の特徴を次のように述べている。

1) アクセント

A型 ハ↓(葉) ハ↓ナ(鼻) オナ↓ゴ アバ↓ラボ↓ネ(あばら骨)

B型 ハ↑(歯) ハ↑ナ(花) オ↑ト↑コ カ↑ライ↓モ(さつまいも)

2) 発音

① 語中の子音の発音が共通語とは大きく異なっている。例えば、語中ではタ行が[r]で発音され、ラ行が[j]で発音され、ダ行とザ行が[n]で発音される。

語中の子音の発音が標準語と大きく異なる。

例 タ行 → ラ行 頭=アタマ→アラマ, [r]

6 上甌村郷土誌編集委員会(1980)による編纂で章ごとの文責は記されていないが、謝辞に上村孝二の名があり、専門や他の業績からは特定できるため、上村の記述として扱うが、参考文献には名前は入っていない。本文の6.3.1.2に引用文を載せる。

だ行 → ナ行 喉=ノド→ノノ [n]
ザ行 → ノ行 火事=カジ→カーニ [n]

② 語中のカ行が [g] に、タ行のチ・ツが [d] に発音される。(語中の有声化)

例 カ行 → ガ行 中=ナガ (naga),
ナ行 → ダ行 熱=ネーズ (ne:dzu)

③ 長音化(語末にイ音列, ウ音列を持つ単語は直前の音が長くなる。)

例 夏 ナツ→ナーツ

6.3.1.2 上村孝二の先行研究より

前述先行研究の注6で述べたように「上甌村郷土誌」(1980)には章ごとの文責は記されていないが、謝辞に上村孝二先生の名があるため、上村の記述として以下に例を引用するが参考文献には名前は入っていない。

1) アクセント

同書によると、アクセントは地域により、アクセントがあるところ以外でも小さい山があり高いところが二ヶ所存在するところがある、とのことである。型としては鹿児島本土方言と同じ二型アクセントであることから、二型の下位区分に関しては今回は触れない。

2) 発音に関して

本部と重複する部分は省いて記述する。

- ① 母音の2つ重なった「アイ」は集落によっていろいろに変化する。例えば「大根」はジャーコン(中甌), デァーコン(里), ダーコン(小島), ダコン(平良), デゴン(鹿島), デーコン(中甌浜・江石・桑之浦・瀬上・下甌村)
- ② 「買う, 逢う」などハ行四段動詞の語尾は au と発音する。カウ・アウ。
- ③ イ列ウ列音で終わる語で, それに先立つ音節を長めて発音する。上甌が盛んで, 下甌は少なくなる。カーキ(柿)・モーチ(餅)・ヘーブ(蛇)・キノドク(気の毒)・ウサーギ(兎)・カラス(烏)
- ④ 語末のイ列ウ列音は明瞭に発音する。
- ⑤ 調音は共通語のとおり発音する。
- ⑥ シとヂ, ズとヅを発音上区別していない。
- ⑦ ガ行鼻音(鼻濁音)が上甌の瀬上に行われるが, 昔は平・鹿島にも行われていた。なお下甌村にも古くは存在していたと推測される。
- ⑧ 「後ろ・柱・面白い」などシの後ろにラ行音が来ると, ウッソ, ハッサ, オモッソカとなる例が浦内方面と下甌南部に行われる。
- ⑨ 小地域の現象であるが, 瀬上や鹿島では語中語尾のカ行タ行を濁音化する。ただし, 瀬上のダ行かしたものはさらにラ行化する。ヨガオドゴ(よい男)【鹿島】ヨガオロゴ(瀬上)アタマノイダガ(頭が痛い)【鹿島】アラマノイラガ(瀬上)

- ⑦ これも小地域のことだが、瀬上では語中語尾のダ行・ザ行音をナ行音化する。フナイ（左）・オニ【叔父】・ネニューミ（ねずみ）・ソネ（袖）コノモ（子供）・トンノー（取るぞー）

6.4 カルタより抽出した語彙による甌島の発音の特徴の分析と先行研究の検証

読み句の方言語彙より論者が分析と先行研究の検証を下に記述する。

① 母音の長音化

上村の説だと、イ音、ウ音に先立つ音が長音化する、とのことであったが、それ以外でも長音化している。下に長音化している例をあげたが、そのうち、「餅」や「首」、「釜炊き」、「道」に関しては当てはまるが、それ以外でも多くの例がある。家の場合は後続の音が無いにも関わらず長音化している。蹴鞠も後続音はア行で、「西」に関しては「ン」音の前である。よって、後続が、イ音、ウ音以外に「ア」音、「エ」音、また、語尾や「ン」音の前でも長音化することが分かった。

もーち	もち（餅）	[中甌]
いえー	いえ（家）	[江石]
けーまい	けまり（蹴鞠）	[江石]
くーび	くび（首）	[瀬上]
みーじ	みち（道）	[瀬上]
だーせ	だせ（出せ）	[里]
かーさ	かさ（傘）	[里]
にーし	にし（西）	[小島]
ほーんぼ	とんぼ	[瀬上]
かまたーぎ	釜炊き	[瀬上]

② ダ行音からナ行音の変化は見られず、ダ行音からラ行音の変化が見られた。

ことれも	ことでも	[小島]
めんろか	めんどう（面倒）	[小島]

ヨ音がド音になる例があった。

ドォー	よ	[中甌]
-----	---	------

拗音が直音になる例がある。

そーがつ	しょうがつ（正月）	[瀬上]
------	-----------	------

③ 促音が長音になる例が観察された。これは先行研究には無いものである。

かよーら	かよった（通って）	[瀬上]
------	-----------	------

④ 助詞の変化が大きい。

あ	は（話題を表す）	[江石]
なー	は（話題を表す）	[小島]

⑤ 音変化が地域によって異なる。また下記の例は後続の助詞が省略されている。下の3例は二重母音が長音になっている

きゅう	きょう（今日）	[里] [瀬上]
-----	---------	----------

くー	きょう (今日)	[江石]
けー	かい (貝)	[瀬上]
かー	かい (貝)	[小島]
きゃー	かい (貝)	[里]

⑥ 清音が濁音になる例がある。

みーじ	みち (道)	[瀬上]
-----	--------	------

7. 考察

7.1 カルタ製作と方言継承に関して

調査の本来の目的は甌島の方言の発音変化が中心であったが、方法をカルタ作製に変更したことにより、カルタの内容、特に文化的な収穫もあった。更に収穫であったと思われる点は、地域の方に少しでも還元できたのではないかということである。継承のことを総括すると以下になる。

- ① 今回は読み句として解説等も時間をかけて読むことができたため、発音の方に注意が向けられる語彙調査のみでは触れることができなかった地元の文化に関する情報も、より得ることができた。
- ② 上述のようにインフォーマントの方々も他地域との発音の差に関心があるようで、発音に関する読み句を提供していただけたことは発音の分析に関しても助けになることであった。
- ③ インフォーマントの方との仲介者（植村氏）はこの活動に関して次のように評価した。「今回、方言カルタの作成に当たり上甌・里町、8地区の地域住民や各地域の『いきいき・ふれあいサロン会』の参加者に協力をいただき集録を行った。協力者の多くが70歳代から80歳代と日常的に方言を使用している最後の世代である。そして、彼らにとって方言とは、甌島の歴史と自身が甌島で生まれ育ち生きてきた証であると共に地域の中で消えつつある存在でもある。また、方言カルタに集録された言葉の話の多くが幼少時代の思い出話や行事であり、方言を日常的に使用する彼らにとってもある意味で生きた方言は過去の物になっているのかもしれないと感じた。地域の中で消えつつある方言、自身の中でも過去の思い出となっている方言を何らかの形で後世に残したいとの熱い思いが多くの協力者から伝わってきた。」
- ④ 方言継承に関しては小中学生に対する継承活動の日程が未定であるため、目的を果たすことはできなかったが、仲介者が調査に快く協力してくださり、また小中学校の先生方との連携も進めてくださったので、今後の展開が期待できる。

7.2 発音規則の検証

今回、わずかな例からでも先行研究と異なる部分や、新たに分かったこともあった。例えば、イ音、ウ音の後続音の前では長音になる、との先行研究があるが、その他の例も多く見つかった。また、音変化にしてもダ行音がナ行音になる例が先行研究では示されたが、今回の調査ではラ行音への変化であった。

貝の音変化は本土でもあるが、本土では「ケ」瀬上では「ケー」と長音になり、他の地域でも長音であることは同じであるが、小島では「カー」と別の音になり、里では「キヤー」と音も変化し更に拗音になるなど、地域による変化が大きい。黒木の[e]音の変化と類似している点があるが、同じではない。助詞に関しては文法的な観点からも考える必要があるため、今後の課題にしたい。

これまで長年にわたり行き来のない状態であったため、それぞれ主に地域内のみで言語が変化し、その結果、他地域の言語（方言）との間に大きな差が生じたと思われる。2020年2年8月29日に甌大橋が開通し

たことにより中甌島と下甌島がつながり、今後言語面でも変化が起こる可能性が出てきた。

8. まとめ

本稿は今回、コロナ禍の影響でカルタ作製を通して発音の分析をするという本来の調査とは異なる方法を取る事となった。直接インフォーマントと面会できず、多くの語彙を採取することはできなかったのであるが、新たな発見もあり収穫は大きかったと考える。また、継承活動においても今後の進展が見込まれる。更に多くの語彙の調査が今後の課題である。

文献

- 上村良平（1960）『上甌村郷土史』上甌村役場，14-19頁
- 木部暢子他（2011a）「人口推移から見る危機的な言語・方言」『文化庁委託事業 危機的な状況ある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国立国語研究所，37-41頁
- 木部暢子他（2011b）『危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業 報告書』国立国語研究所，69-76頁
- 窪菌晴夫他（2015）「甌島里方言記述文法書」『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究 アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明 サブプロジェクト 鹿児島県甌島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究』国立国語研究所，12-15頁
- 甌村郷土誌編集委員会編（1980）『上甌村郷土誌』上甌村，287-289
- 小林隆他（2007）『ガイドブック方言調査』羊書房，1-19頁
- 祖慶壽子（2020）「言語危機を抱える甌島における言語状況への考察」『地域総合研究』鹿児島国際大学，第47巻，第2号，39-40頁
- 祖慶壽子（2021）「カルタ作製により触発される方言継承意識—ゼミ活動としてのカルタ作製例—」『国際文化学部論集』鹿児島国際大学国際文化学部，第1巻第3号，237-247頁
- トッピング・マシュウ・W（2021）「石垣市におけるしまくとぅばの言語イデオロギーと継承—参加型アクション・リサーチとしての事例研究—」『島嶼地域科学』第2号，79-96頁

謝辞

本稿は鹿児島国際大学附置地域総合研究所令和元年・2年度清水基金プロジェクトの助成を受けて調査した内容を基に執筆しました。調査及び継承活動（読み札作製）に当たっては薩摩川内市社協上甌支元所長の川崎康弘様、植村俊也様、他所員また地域住民の方々に大変お世話になりました。取り札作製（絵札）には鹿児島国際大学卒業生野元達平さん、在学生の菊永さん、長坪さんの協力を得ました。ここに、皆さんに感謝申し上げます。

また、カルタ製作の予算は清水プロジェクトの予算により作製されました。上記の方々とともにお礼を申し上げます。